

出会い

2024. 12. 20

この前、久しぶりに市役所に行ってきた。幼稚園のおつかいのような仕事である。球根を受け取りに行った。向かったのは、〇〇〇〇課だった。懐かしい感じがした。

中学校の校長をしていたときに、市の事業の推進委員を務めたことがある。その事業には、作文コンクールがあった。商売柄、審査員も任された。その担当部署が、〇〇〇〇課だった。部署の中での直接の担当者が、市の職員として採用されたばかりの女性だった。上司と一緒に、あいさつに来てくれた。まだ、採用されたばかりだということ、新採用職員は、自家用車で通勤できないことなどを話したことを覚えている。

推進委員会や作文コンクールの審査会では、会の進行を担っていた。初々しさがありながらも、しっかりと仕事をしていた。事前に準備をしてきていることが感じられた。慣れないながらも、一生懸命役目を果たそうと努力しており、好感をもつことができた。そして、伸びしろを感じた。きっと、彼女の姿を自分の娘に重ね合わせていたこともあり、記憶に刻まれていたのだろう。

球根を受け取り、数年前のことを懐かしく思いながら、〇〇〇〇課をあとにして、エレベーターに向かった。すると、後ろの方から「高澤先生！」と呼ぶ声がした。振り返ると、小走りにかけてくる女性が目に入った。あ那时的彼女だった。「〇〇〇〇のときにお世話になった〇〇です」すぐに彼女だとわかった。そのくらい、印象に残っていた。

出会いとは、時間の長さではない。エレベーターの前で、しばらく話をした。採用3年目とはいえ、まだまだ若い。「がんばってね」とありきたりの言葉をかけ、エレベーターに乗った。そして、考えた。

自分の部署に、見たことがあるおじさんがやってきた。ああ、あ那时的校長先生だ。そうか、今は幼稚園にいるのか。向こうは、こちらに気づいてはいない。まあ、声をかけなくてもいいか。私のことを覚えているかもわからないし、会うこともないだろう。このくらいの反応でも決しておかしくはない。

だが、彼女は違った。わざわざ自分の席から、帰ろうとするおじさんを追いかけてきてくれたのである。3年前に私が感じたものは、やはり確かだった。伸びしろは、間違いではなかった。彼女の人柄、人間性だろう。1年目から、それを感じさせてくれたが、ますます磨きがかかっていた。ちょっとした出来事から、人はいろいろなものを受け取るし、感じる。そして、考える。

久しぶりの市役所だったが、気分よく駐車場を出ることができた。彼女は、これからも様々なことを糧とし、社会人として、一人の人間として成長していくことだろう。数年後、また会ってみたい。その頃には、今とは違う部署で、生き生きと活躍しているに違いない。これからの彼女が、ますます楽しみである。